県内ワイド

元気よ、届け

日赤県支部・被災地便り

日赤県支部
総務課長
山本裕行さん

「大いに甘えて」に喝采

信頼関係

道路が寸断され、一時、陸の孤島となった避難所。避難住民たちは外部に窮状を伝えようと、校庭に石灰で大きく「SOS」と書いた。それでも、震災直後の一週間は救援物資が届かず、持ち寄った食料で何とかしのいだ。

このような厳しい環境下での支援活動は、わずかな行き違いだけで、トラブルに発展することもある。

この避難所にわれわれが着く前、救護を担当していた医療班。救護所の診療時間を設定した上で「避難住民が夜中や朝早くから来るなど、マナーが悪い」と、救護所から撤退すると避難住民の前で話すなど、強硬な姿勢だったとし、さらに、受診者数も少なくなってきたという理由で、診療時間を短縮し夜間診療もやめると、避難所側に申し入れたという。聞き入れられない場合はこの地域には医師が三人いたが、全員が死亡または行方不明。夜間は避難所に通じる川沿いの道が通行止めとなるため、避難住民たちはいざという時の医療不安を抱えていた。

引き継いだわれわれが、「私たちの班には医師が二人いて、二十四時間態勢で対応できる。夜中であろうが朝方であろうが、具合が悪かったらいつでも気軽に来てください。避難所に来られない人には、一軒一軒訪問させてもらいます。どうか皆さん、大いに甘えてください」と話すと、避難住民から喝采の声があがった。

被災者は、たとえ血圧を測るだけでも、救護所を訪れて話をするだけでも気持ちが安らぐ。避難所となっている体育館で、一人一人に声を掛けながら往診し、避難所以外の各家庭へも訪問診療に出掛けた。

救護される側はもちろんだが、する側も厳しい状況の中で活動している。互いに余裕のない中で生まれたトラブルだったのだろう。

活動の中であらためて分かったのが、地元ヘルパーの皆さんの力。ずっと地域住民と接しており、健康や生活面を一番把握している。そこで、救護にあたった福井赤十字病院の山内幸子看護師長は、心配な人が出るたびに「ヘルパーさん、（この人の日頃の状況を）教えてください」と意見を求め、相互の信頼関係を築いていった。

支援に訪れた人たちは、誰もが被災者のことを思っている。わだかまりを解いて、落ち着いて話し合えば必ず分かり合えるはずだ。

救護所で血圧を測るだけでも、被災者の気持ちは安らぐ＝岩手県陸前高田市で（日赤県支部提供）

協力し合うこと、連携し合うことは当然。われわれ支援に訪れる側もまた、互いに「ありがとう」の気持ちを持つことが、被災者のためになっていく。

福井に戻る日、山内看護師長が、協力してくれたヘルパーさんたちに感謝を伝えた。ヘルパーさんたちは涙を流して別れを惜しんでくれた。

被災地からの「撤退」を決めるのは、地元自治体など。被災者と直接、触れ合っているわれわれ救護班は、間違っても被災者の前で口にしてはいけない言葉だ。被災地のために、被災者が喜んでくれることをする。それがわれわれの役割だと、肝に銘じている。